

2012年度近未来チャレンジ論文特集

阿部 明典

(千葉大学)

以下の論文が2012年度近未来チャレンジ論文特集で採録されたものである。

- 砂山 渡, 高間康史, 西原陽子, 梶並知記, 申間宗夫, 徳永秀和: 統合環境 TETDM を用いたマイニングツールの開発と利用の実践
- 鳥海不二夫, 篠田孝祐, 榊 剛史, 栗原 聡, 風間一洋, 野田五十樹: 異種協調型災害情報支援システム実現に向けた基盤技術の構築

前者は、卒業に向かって着々と進んでいるチャレンジで、後者は始まったばかりのチャレンジである。

前者は、複数のテキストマイニング技術を柔軟に組み合わせさせて使える統合環境を構築し、社会的創造的活動を支援できる環境としての提供を目指しているチャレンジである。すでに開発されつつある TETDM の試用版は公開されているので、試してみることに、それに関していろいろ議論することもできると思う。

これに関しては、何回か言及していると思うので今回はこれ以上は省略する。卒業に向けて、最終的な積み重ねを期待したい。

さて、記憶にもまだ新しいが、2011年3月11日未曾有の地震が東北地方を中心に襲った。

そのとき、震災発生直後から ICT の活用を中心とした支援システムが開発・提供された。Google や Yahoo に代表される企業エンジニア集団だけでなく、情報技術に必ずしも詳しくはない個人も数多く参画し、彼らの活動は直接的な救援ではなかったかもしれないが、被災者の助けになった。人工知能としては少しは社会の役に立っていたように見える。しかしながら、鳥海らの提案しているチャレンジは、従来のトップダウン的な支援活動とは反対に、「情報」という側面からボトムアップに

支援システムを構築可能な環境を整え、今後も日本で発生するであろうさまざまな災害において災害救助支援の「現場」に多くの市民の参画を促すことを目指している。

具体的には、異種協調（異なる情報をもつ人々、またはサービスが協調することで新しい情報の生成やサービスの提供を行う）型支援システムのための基盤技術を開発し、想定される今後の災害時に、AI 技術が支援に活用されることを最終的な目的としている。想定外の事態に短時間で対応できる仕組みを人工知能として取り組むというチャレンジのようである。ぜひ、頑張って素晴らしいものとしてほしい。

さて、2013年の全国大会では、3件のチャレンジが採択された。近年としては、珍しく多くのチャレンジの投稿があった。喜ばしいことである。詳細に関しては、恐らく、来年の特集で言及することになると思うが、ここで一つ言っておきたいことは、「近未来チャレンジに皆さん応募してください」である。チャレンジとオーガナイズドセッションの差がわかりにくいようであるが、チャレンジはオーガナイズドセッションよりは、チャレンジングなことを扱っていると考えてよいと思われる。つまり、今はやや実現は難しいが、実現できればすごいことになるというテーマを扱う。したがって、学会としても卒業した暁には表彰を行うとともに、次年度に全国大会で、お披露目セッションを行うことができる。確かに、これだけは、やや応募する動機に欠けるかもしれないが、時代の先端を学会という傘の下で行う、さらには、学会から認知されるということは、研究者として楽しいのではないだろうか？ 今後も大会委員はチャレンジを行うメリットを考えていくようであるが、まずは、チャレンジする楽しさを感じてほしい。

特に、さまざまな問題が起こる現代、それを解決するために、人工知能としてのチャレンジを提案してほしい。